

総 説

幼児期におけるソーシャルスキルの発達と適応

命婦 恭子*

<要 旨>

本研究では、幼児期のソーシャルスキルの発達と社会適応について先行研究をもとに検討を行った。対人関係を円滑にするためのソーシャルスキルを獲得していることは、社会適応やメンタルヘル스에ポジティブな影響を与える。幼児期は、心の理論や視点取得、感情理解といったソーシャルスキルに関連する認知能力が発達し獲得される時期である。心の理論の発達により、他者の視点を取得し、他者の行動の意図や感情を予測し、それに合わせた行動を選択することが可能となる。さらに、他者と仲良くしたいという親和動機や自分の感情をコントロールして行動を選択する能力が伴うことがソーシャルスキルの獲得に影響を与えていた。

幼児期にソーシャルスキルが不足していると、ポジティブな仲間関係を形成しにくく、その後の仲間関係や学校適応にも悪影響がみられる。幼児期初期のソーシャルスキルは、母子関係に代表される二者関係で育まれる。さらに、家庭内では幼児を含む三者以上の多人数でのコミュニケーションが日常的に展開されており、それに参加する幼児は主体的にスキルを獲得していた。

キーワード：ソーシャルスキル, 幼児, 発達, 適応

1. はじめに

日本において乳児期には、保育所など集団の中での生活を経験している子どもがいるが、もっぱら家庭の中で養育され、社会活動への参加は親と一緒に場面しか経験していない子どももいる。幼児期になると、ほとんどの子どもたちは、幼稚園への入園などを契機に家庭以外の集団での生活を経験するようになる。また、幼児期には、社会生活の中で対人関係を形成するために重要な能力である「心の理論 (theory of mind)」が発達するとされている。すなわち、幼児期は対人関係を形成するための認知能力や具体的なスキルの発達にとって重要な時期であるといえる。

そこで本論文では、幼児期のソーシャルスキル (social skills) について国内の研究を中心にレビューし、ソーシャルスキルと対人的認知能力の関連やソーシャルスキルと社会適応との関連についてまとめる。また、幼児がソーシャルスキルを獲得するプロセスや、幼児期におけるソーシャルスキル・トレーニング (social skill training; SST) の有効性について検討する。

2. ソーシャルスキルと対人認知能力の関連

ソーシャルスキルとは、対人関係を円滑にするための具体的な技術であり、社会適応を規定する要因の一つといわれている。相川は、ソーシャルスキルを具体的な対人場面で用いられる認知過程と実行過程を含む、言語的ないしは非言語的な対人反応としてとらえ、その生起過程モデルを提唱している¹⁾。そのモデルでは、相手の反応から、それを解釈し、対人目標の決定、対人反応の決定、感情の統制を経て、対人反応が実行され、それにより相手の反応が起こるという循環を示している。さらに、それぞれの過程は、相互にフィードバックしあい修正されるダイナミックなものとされる。また、その循環の中心には、社会的事象についての知識が体制化され情報群として構造化されている社会的スキーマが想定されている。この社会的スキーマは、それぞれの過程で活用されると同時にそれらからのフィードバックにより変容していく。

ソーシャルスキルが生起する最初の過程である、相手の反応を解釈するために必要な認知能力は「視点取得 (perspective taking)」といわれる。Davis は、共

* 西南女学院大学短期大学部 保育科

感性を複数の構成要素からなる多次元的なものととらえ、認知的要素と感情的要素があり、認知的要素の一つとして視点取得を位置づけている²⁾。共感の感情的要素である「情動伝染」や「感情移入」はさまざまな動物で観察されるが、認知的共感ヒトに固有のものであることが示唆されている³⁾。

同じく相手の反応を解釈する認知能力として、心の理論が挙げられる。溝川・子安⁴⁾は心の理論を、人間の行動を説明し予測するために自己や他者に心的状態を帰属することと定義している。すなわちヒトは、他者の行動の背景には他者の知識や願望、意図、信念といった心的状態があることをふまえて、実行された行動を説明したり、これから実行されるであろう行動を予測する。同時に、自分自身の行動についてもその背景に自分の心的状態があることを理解している。さらに、自分が他者の心的状態を理解するように、他者も自分の心的状態を理解しているということを理解している。このような認知的能力が心の理論である。ヒトの子どもは2歳頃から徐々に心の理論を発達させ、5歳ごろに獲得するとされる。心の理論は共感性とは異なる能力であるが、関連の強い認知能力であるといえる。この心の理論が発達することにより、共感性の認知的要素である視点取得の精度が高くなる。これらの認知能力が発達することで、ソーシャルスキルの生起過程の最初のステップである相手の反応に対する読解が容易になり、かつ正確になっていくと考えられる。すなわち、心の理論と共感性は、ソーシャルスキルの獲得のために重要な認知的能力であると考えられる。

心の理論の発達と他者の行為の意図の判断の関連について、日本の幼児を対象とした研究で、心の理論が発達した幼児ほど相手の行動が故意かどうかを正確に判断できていることが明らかにされている⁵⁾。3歳から5歳児を対象に、誤信念課題を用いて、心の理論の獲得を測定し、葛藤相手の意図をたずねたところ、誤信念課題の正答者の方が、葛藤相手の意図が故意であるかどうかをよりよく理解している傾向がみられた。誤信念課題の正答者・誤答者の数が拮抗している4歳児においてもその傾向があった。相手の行動が故意かどうかの判断は、その後の自分の行動を決定するために重要な要素だと考える。そのため、この研究からも心の理論の発達が、相手の反応を正確に読解するために重要であることが理解できる。

共感性のもう一つの要素である感情的要素に関連している認知的能力として感情理解が挙げられる。森野⁶⁾は、心の理論と感情理解のそれぞれの発達の個人

差と仲間に対するソーシャルスキルの関連を分析している。その結果から、心の理論は、信念や欲求という抽象的で直接観察不可能な心的状態を扱っているのに対して、感情理解は、悲しみや恐れといった表情や身振りからある程度観察できる心的状態を扱っている別能力であると考察している。ただし、月齢と言語能力を統制した場合、心の理論の発達と感情理解能力には正の相関がみられたことから、これらの能力は関連していることが示されている。ソーシャルスキルとの関連では、年長児で、心の理論の発達とソーシャルスキルの間に有意な正の相関がみられたが感情理解能力との間には関連がみられなかった⁶⁾。ここから、ソーシャルスキルの獲得のために重要な能力は、心の理論であり、共感性の中でも認知的要素である視点取得であることが推察できる。

田中ら⁷⁾は、感情理解の能力を真の感情理解と見かけの感情理解に分けて分析している。見かけの感情とは、真の感情を抑制し、それとは異なるが表出されている感情のことを指す。4歳2か月から6歳1か月の幼児を対象とした実験研究から、幼児期には表出された感情と一致している真の感情理解の発達が先行し、その後、明確には表明されていない信念の理解や見かけの感情理解が発達していくことを示している。また、信念理解や見かけの感情理解は萌芽段階で、本格的には学童期以降に獲得されていくと考察している。見かけの感情理解では、他者が表出している感情と真の感情が異なる場合に、相手のおかれている状況や嗜好などの表情以外の文脈的要因に基づいて感情を推測する必要がある⁷⁾。すなわち、表出された他者の感情を理解する能力の発達が先行し、その後、他者の視点に立つ必要のある信念理解や見かけの感情理解が発達することが示唆されている。

大対・松見⁸⁾は、ソーシャルスキルと複数の認知的能力の関連について実験を用いて検討している。そのさい、先行研究を参照しながら視点取得を知覚的視点取得 (perceptual perspective taking)、感情的視点取得 (affective perspective taking)、認知的・概念的視点取得 (cognitive or conceptual perspective taking) の3つに分類している。このうち社会性との関係が強いとされる認知的・概念的視点取得と感情的視点取得に着目し、発達を考慮しながら感情表出の統制、対人問題解決、およびソーシャルスキルとの関連を検証している。その結果、他者視点取得は3歳ごろから発達し、5歳までにほとんどの子どもができるようになるという先行研究と一致した結果が得られ、特

に感情的視点取得では3歳児の70%が獲得していた。その一方で、感情表出の統制は、年齢が上がるとともに発達することが示されたが、5歳児でも25%しか獲得しておらず、視点取得よりも遅れて発達していた。同様に、対人問題解決方略でも3歳児より5歳児のほうが適切な方略を選択できていたが、60%程度にとどまっており、獲得時期に個人差があることが示された。これらの特性とソーシャルスキルとの関連では、視点取得を獲得することが感情表出の統制の発達に影響を与え、対人問題解決での適切な方略を選択できるようにし、実行されるソーシャルスキルを適切なものにするということが示された。これは、相川¹⁾が提唱したソーシャルスキルの生起モデルを実証的に示した結果といえる。さらに、相手の反応を解釈する能力である他者視点取得と対人問題解決方略の選択という認知プロセスのなかで感情統制が果たす役割を指摘し、幼児に対するSSTで感情コントロールのスキルを直接指導するプログラムの有用性を示唆している⁸⁾。

また、中学生を対象とした研究では、他者の視点に立って物事を考える傾向の高さを視点取得とし、ソーシャルスキルの変化への視点取得の影響が縦断的に調査されている⁹⁾。視点取得傾向は、ソーシャルスキルの増加を直接的に予想するものではないが、親和動機が高い場合にはソーシャルスキルを促進させることを確認している。この結果から、対人関係を円滑にするための技術であるソーシャルスキルを増加させる動機付けは、他者と仲良くしたいという感情であり、それが低い場合には、視点取得の能力があってもソーシャルスキルの増加にはつながらないということが読み取れる。

以上のような研究から、ソーシャルスキルの獲得と関連している認知能力は心の理論や視点取得であることが示された。それらの能力は幼児期に獲得されているが、学童期にかけてさらに発達し、特に表明されない感情や信念について理解し他者の視点を取得することは幼児期には難しい課題であることがわかる。またソーシャルスキルを増やしていくためには、これらの能力を獲得することに加えて感情をコントロールする能力や他者と仲良くしたいという感情といった動機付けが媒介していることが示されていた。

3. ソーシャルスキルと社会適応との関連

ソーシャルスキルが不足している子どもは、仲間か

ら受容されにくく、社会的に不適応状態になる可能性が高いことが明らかにされている¹⁰⁾。また、ソーシャルスキルの欠如は、抑うつの代表的なリスク要因としても挙げられており、メンタルヘルスへの悪影響も懸念される¹¹⁾。松原ら¹¹⁾は、2つのコホートを対象に縦断的調査を行っている。対人場面で発揮されるさまざまなソーシャルスキルのうち、仲間集団での規律を守る協調性スキル、仲間を誘ったり活動に参加したりする主張性スキル、仲間との対立場面で自分の気持ちをコントロールする自己抑制スキルの3つのカテゴリに注目し調査を行った。その結果、幼児期の協調性スキルと主張性スキルは児童期である小学校5・6年生のころのソーシャルスキルを媒介して児童期の抑うつを抑制することを明らかにしている。ソーシャルスキルは、対人関係を円滑にするための具体的なスキルであり、年齢が高くなるにつれて対人関係が広がり、社会的に求められるスキルが変化することから多様なスキルを身につける必要が生じる。新たなソーシャルスキルは、家庭や学校、地域生活の中で対人関係を実践する中で獲得されていく。幼児期に協調性や主張性といった望ましいスキルを持つ幼児は、良質な仲間関係や教師との関係を構築することができ、新たなソーシャルスキルを獲得できる機会が多く、獲得したスキルを用いて円滑な対人関係を実践し、周囲からのポジティブなフィードバックを受けやすい。このようなポジティブな環境が学童期後期まで維持され、抑うつ症状を生じにくくすると考察されている。反対に、幼児期のソーシャルスキルが低い子どもは、良好な仲間関係や教師との関係が構築できず、新たなソーシャルスキルを獲得する機会も得にくくなると考えられる。

その他にも、幼児期のメンタルヘルスとソーシャルスキルについての研究がみられ、幼児期から小学校入学後までの縦断研究から、幼児期に攻撃性が高く社会的コンピタンスの低い子どもは、仲間から拒否され、拒否されるから一層攻撃的行動をするという悪循環に陥る可能性を示し、そのため孤独感を強く感じるということが明らかになっている¹²⁾。社会的コンピタンスとは、対人状況において社会的に承認された方法で効果的な相互交渉を行う能力であり、ソーシャルスキルとは、その都度実践される個別の行動を指す¹³⁾。社会的コンピタンスの低さは、ソーシャルスキルを実践する能力の低さを示している。また、攻撃性の高さは対人関係において攻撃的な行動を選択しやすいことを示しており、攻撃性が高く社会的コンピタンスが低い子どもは適切なソーシャルスキルを獲得していない子どもであ

るといえる。その様な子どもは、孤独感を強く感じていることが明らかとなった。

磯部・佐藤¹⁴⁾は幼児を対象に、攻撃行動を関係性攻撃と身体的攻撃に分けて、ソーシャルスキルとの関連を調査している。仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃行動である関係性攻撃を高く示す幼児は、規律性スキルは低い、友情形成スキルや主張性スキルは比較的優れているという結果を見だしている。この結果を受けて、関係性攻撃は、身体的攻撃とは違い、仲間関係が成立していることが前提条件であり、仲間関係を成立させるソーシャルスキルを有していることが、この攻撃の必要条件になるからであろうと考察している。また、関係性攻撃の高い女兒は、友達に対して積極的に働きかけるがゲームなどの集団活動への参加が少なく、特定の子どものみの関わりを持っている可能性を示唆している。

幼児期のソーシャルスキルと社会適応の関連の性差について言及している研究もみられる。大内・櫻井¹⁵⁾は、幼稚園に通う幼児の観察から、非社会的遊びの発現頻度とソーシャルスキルの関連を検討している。その結果、女兒において、非社会的遊びの頻度と協調スキルの低さ、不注意・多動傾向の高さが関連していると、非社会的遊びが多い男児では、主張スキルが低い傾向があることを指摘している。それらの関連性について縦断的なデータの分析から、女兒においては、仲間との関係を築くときに協調スキルが重要であり、これが低い女兒は仲間との関係をうまく築くことができず非社会的遊びが増えると考察している。男児においては、非社会的遊びの頻度が高いと主張スキルが育ちにくいという関連があるとしている。ソーシャルスキルと孤独感の関連を調査した別の研究においても、協調スキルに欠けることは、女兒にとって対人関係における大きなリスクであり、協調スキルが未熟な女兒は、社会的不適応に陥る確率が男児より高いことも指摘されている¹⁶⁾。

これらの研究結果から、幼児期のソーシャルスキルが仲間や教師などの他者との関係を円滑にし、学童期にいたるまでの社会適応を良好にすることが示された。また、社会適応が良好であれば新たなソーシャルスキルを獲得しやすくなるという好循環がみられる。その一方で、ある種のソーシャルスキルの高さは対人関係を使った攻撃行動という不適応行動として表出されることもある。また、社会適応に関連するスキルは性差があり、男児にとっては仲間関係を開始するため

の主張性スキルが重要であり、女兒は仲間関係での規律を守る協調スキルが重要であることが示された。

4. ソーシャルスキルの形成と養育者のかかわり

ここまでみてきたように、幼児期のソーシャルスキルの発達、幼児期の社会適応やメンタルヘルスに関連しているのみならず、児童期の社会適応やメンタルヘルスとも関連していることが示されている。そのため、幼児期にどのような支援をすることがソーシャルスキルの形成に役立つのかを知ることが、その後のソーシャルスキル形成や社会適応を支援するために重要だと考えられる。ここでは、幼児のソーシャルスキルの形成に養育者のどのようなかかわりが有効であるのかをみていく。

幼児のソーシャルスキルと育児環境の関連では、父親が家庭にいる子どもは、いない子どもに比べて自己制御スキルが高く、経済的余裕の高い家庭の子どもほど、自己表現、自己制御、協調のスキルが高いという傾向がみられた¹⁷⁾。この結果から、父親の存在は、経済的にも情緒的にも育児環境を安定させる効果があると考察されている。父親が家庭にいないひとり親世帯の場合、経済的に余裕がない家庭も多いと考えられるが、ここではそのような関連は分析されていない。また、分析対象を母親が回答したもの限定しており、母親不在のひとり親世帯は分析から除外されている。また、養育者からのかかわりの頻度よりも、援助的なかかわりや主体性をうながすかかわりをするかどうかという、かかわりの質がソーシャルスキルの高さに関連していた。このことから、共働き家庭のように子どもと接する機会が制限されていても、その質を高めることで子どものソーシャルスキルを育むことができると考察されている¹⁷⁾。

次に、幼児と養育者や実験者などの大人とのコミュニケーションを詳細に分析し、ソーシャルスキルの中でも対話に関するスキルに焦点をあてて、その発達について検討した研究結果をみていく^{18) 19) 20)}。

大人が子どもとの遊びの中で何らかの「ふり行動」をするときに、笑顔をみせたり子どもを注視したりするなど自分がふりをしていることを示すための行動をする。これらの行動を「ふりシグナル」と定義し、子どもの月齢によりシグナルの働きの違いが検討されている²⁰⁾。その結果、18か月から24か月児では、大人のふりシグナルがあってもその行動がふりか現実かの

区別はできないが、子ども自身のふり行動を促すことが示された。この発達段階では、ふりシグナルが“これは遊びである”ということを相互に了解するためのメタコミュニケーションとして機能していた可能性が考察されている。30 か月児では、ふりシグナルによって子ども自身のふり行動は促進されず、シグナルの有無にかかわらず、他者がふり行動をすると子ども自身のふり行動が促進された。ふりシグナルは、他者の行動がふりなのか現実なのかを判断する手がかりとして用いられていた。30 か月は、ふり遊びから子ども同士の“ごっこ遊び”に移行する時期であり、この実験結果からも、他者のふり行動からそれがふりであるということが判断できるようになり、それに合わせた行動を取るようになるという子どもの社会性の発達をみることができると考察されている。

また、2 歳児を対象とした研究では、親子間で会話が行われている様子の観察から、対象児が自分の言語的なふるまいに対する相手のふるまいをみることによって、相手が先の自分の言語的なふるまいを適切に解釈していないことを理解し、その問題を解決すべく自分の先の発言をやり直すことができることが示されている¹⁸⁾。ここで観察された2 歳児は、他者とことばを交わす中で、他者が考えていること、すなわち他者の「心」を理解してやりとりを実践していると考察されている。これは、他者の行動や反応を他者の心に帰属させる「心の理論」の発達を、具体的な人とのかわりである日常的相互行為の実践として観察したものである。これまで心の理論の先行研究として蓄積された実験場面では、2 歳児は心の理論の獲得以前の発達段階とされているが、他者との相互行為の中で実践され、確認・更新される手続き的知識として学習し、実行しているのである。

上記のような二者間の相互作用ではなく、多人数での会話のなかで、幼児が自分の役割を判断し遂行する能力について検討した研究では、4 歳児が発話者の視線や姿勢を手がかりに会話への参入を放棄する様子が示されている¹⁹⁾。家庭内での会話を観察し、父親が発した言葉を、発話者の視線や体の向きなどから自分を対象としたものかどうか判断し、その発言が自分に向けられていないと評価した場合、自分は会話に参加する意図があったとしても、その会話から撤退する様子を明らかにしている。そのさい、その発言の直前に自分や他の家族がどのような行動をしていたかが判断の速さに影響している可能性も示唆されている。これらのことから、幼児が自分以外の家族メンバーが円滑に

会話が行えるような環境を能動的に組織することができると考察されている。すなわち家族の中で、言語やコミュニケーション発達のための支援を受ける存在とされていた幼児を、家庭内のコミュニケーション実践場面に能動的に働きかけることができる存在としてとらえ直す必要性が示唆されている。

このように養育者の援助的なかわりや主体性をうながすかわりは、子どもたちのソーシャルスキルを育成するが、それだけではなく、さまざまなコミュニケーションの実践に参加する中で、幼児はソーシャルスキルに関連する認知的能力を発達させている。また、実践の中で自分の役割に合わせたふるまいをするというスキルを幼児自身が能動的に身につけていることも注目すべき点である。

5. 幼児のソーシャルスキル・トレーニング (SST)

集団を対象とした SST は教育現場に取り入れられ、国内では小中学生を対象とした取り組みが多いが、就学前の幼児を対象としたものもみられる^{21) 22)}。国内で行われた介入研究の問題点として、サンプルサイズが小さいこととコントロール群が設定されていないことが挙げられる²²⁾。そこで、介入群として年長児 309 名を確保し、標準的なレベルが想定できる標準群 (Normative samples) を設定した研究が実施されている²²⁾。その結果、介入群の訓練前後で主張性スキルと協調スキルが有意に高くなっていた。また、協調スキルは、攻撃性や多動といった外在化問題行動を低減させ、主張スキルは、不安や引っ込み思案といった内在化問題行動を低減させていた。このように、幼児に対する集団 SST が日常生活場面でのソーシャルスキルの獲得のために有効であることが確認されるとともに、問題行動の改善にもつながっていることが明らかとなった。

この研究で高橋ら²²⁾が行った介入では、幼稚園において 35 分のセッションを1 か月に1セッションのペースで実施された。実施者は幼稚園の担任教諭であり、1 学級 30 ～ 35 名の幼児を 5 ～ 6 名の小グループに分け、そこに幼稚園教諭 1 ～ 2 名と保護者 2 名を加えた 8 ～ 9 名でグループを構成している。セッションを実施する担任教諭に対しては、SST の基礎理論と各セッションについての事前説明が行われ、参加する保護者に対しては、担任教諭から事前に説明されている。これらのことから、実施する幼稚園にとって人的・時間的負

担は少なくない。そのため、このプログラムが有効であっても、多くの幼稚園で日常の保育に取り入れて実施することは困難であると考えられる。

教室などに設定されたトレーニング場面で獲得したスキルを日常生活に般化できるかどうかは、SSTにおける主要な課題であるといえる。そこで、幼児に対する集団 SST においても、効果を促進するために自由遊び場面でのトレーニングを併用することが提案されている²⁴⁾。金山ら²⁴⁾は、年中児を対象に教室での集団 SST と自由遊び場面での SST を交互に実施するプログラムの効果を検証している。自由遊び場面の SST とは、ターゲットスキルの使用を促すようなプロンプトやフィードバックなどの介入を、進行中の遊びを妨げないように配慮しながらトレーナーが行うというものであった。その結果、協調スキルや社会的働きかけスキル、教室活動スキルがトレーニング後に有意に高くなるという効果がみられた。自由遊び場面での SST を取り入れたことが、集団 SST の効果を日常生活場面へ般化させることに有効であったと考察されている。先に述べた高橋ら²³⁾の研究では、集団 SST 以外の園活動時間で介入的な操作の依頼・指示は一切ないとされているが、担任教諭が SST の基礎理論とセッションの目的と進め方について学んでいることから、その知識とスキルが日常の保育に影響しないとは考えにくい。むしろ、担任教諭への心理教育が日常の保育へのポジティブな影響を与えていると考える方が自然ではないだろうか。すなわち、金山ら²⁴⁾の介入ではトレーナーが果たした役割の一端を、担任教諭が自由遊び場面で果たしている可能性は考慮されるべきであろう。

このように、幼児への集団 SST はソーシャルスキルの育成に有効であり、その効果は、自由遊び場面でのプロンプトやフィードバックが行われることによって、日常場面にも般化される。また、前節でみたように幼児のソーシャルスキルの獲得は、大人による何らかの支援によって促進されるという側面だけでなく、幼児自身がコミュニケーションの実践に能動的に参加することによって、実践され、確認や修正がなされ、身についていくという側面がある。先行研究では、集団 SST を実施せずに日常の遊び場面でのプロンプトやフィードバックのみの介入の効果を測定したものはみられない。このような介入は、一般の幼稚園や保育所でも取り組みやすいソーシャルスキルの支援方法として検討に値すると考える。

6. まとめ

本研究では、幼児期のソーシャルスキルについて、ソーシャルスキルと対人的認知能力の関連や社会適応との関連についてまとめ、幼児がソーシャルスキルを獲得するプロセスや、幼児期におけるソーシャルスキル・トレーニングの有効性についても検討した。

ソーシャルスキルの獲得のためには、対人認知能力の中でも心の理論の発達と共感性の認知的要素である視点取得が重要であった。心の理論の発達により、他者の視点を取得し、他者の行動の意図や感情を予測し、それに合わせた行動を選択することが可能となるからである。他者の行動を他者の心に帰属して考える能力である心の理論は、実験場面での測定では、4歳以降に獲得されるが、日常的なコミュニケーションを観察すると、2歳児にも心の理論による行動がみられた。これらの認知能力の発達に加えて、他者と仲良くしたいという欲求を動機付けとしてもつことや自分の感情をコントロールして行動を選択する能力が伴うことがソーシャルスキルの獲得に影響を与えていた。

日本の多くの子どもにとって、幼児期から家庭を離れた社会生活が始まる。先行研究では、この時期にソーシャルスキルが不足していると、ポジティブな仲間関係を形成しにくく、そのことがスキルの獲得を阻害するという悪循環になり、その後の仲間関係や学校適応にも悪影響がみられた。そのため、幼児期からソーシャルスキルの獲得を支援することは、その後の社会適応を支援するために有効であると考えられる。

幼児期初期のソーシャルスキルは、母子関係に代表される二者関係の中で育成されることが知られているが、それに加えて、家庭内では幼児を含む三者以上の多人数でのコミュニケーションが日常的に展開されており、それに参加する幼児が主体的にスキルを獲得している様子が、先行研究において明らかにされた。

さらに、幼児を対象とした教室場面での集団 SST が実施され、その有効性が示されている。その効果を日常的な場面に般化するためには、自由遊び場面での働きかけを併せて実施することが望ましい。

文 献

- 1) 相川充：人づき合いの技術. サイエンス社. 東京, 2009
- 2) Davis, M, H. Empathy: A social Psychological Approach. Madison, WI: Brown& Benchmark 1994
菊池章夫訳 共感の社会心理学. 川島書店. 東京, 1999
- 3) 長谷川眞理子：進化心理学からみたヒトの社会性（共感）. 認知神経科学. 18（3・4）：108-114, 2016
- 4) 溝川藍, 子安増生：他者理解と共感性の発達. 心理学評論. 58（3）：360-371, 2015
- 5) 鈴木亜由美, 子安増生, 安寧：幼児期における他者の意図理解と社会的問題解決能力の発達：「心の理論」との関連から. 発達心理学研究. 15（3）：292-301, 2004
- 6) 森野美央：幼児期における心の理論発達の個人差, 感情理解発達の個人差, 及び仲間との相互作用の関連. 発達心理学研究. 16（1）：36-45, 2005
- 7) 田中里奈, 清水光弘, 金光義弘：幼児期における他者視点取得能力の発達と社会性との関連. 川崎医療福祉学会誌. 23（1）, 2013
- 8) 大対香奈子, 松見淳子：幼児の他者視点取得、感情表出の統制、および対人問題解決から予測される幼児の社会的スキルの評価. 社会心理学研究. 22（3）：223-233, 2007
- 9) 藤原和政, 西村多久磨, 福住紀明, 河村茂雄：視点取得はソーシャルスキルの変化を予測するか－親和動機の調整効果－. 心理学研究. 89（6）：562-570, 2019
- 10) 佐藤正二, 金山元春：基本的な社会的スキルの習得と問題行動の予防. 精神療法. 27：246-253, 2001
- 11) 松原耕平, 新屋桃子, 佐藤寛, 高橋高人, 佐藤正二：幼児期の社会的スキルと問題行動が児童期の社会的スキルと抑うつに及ぼす影響. 認知行動療法研究. 45（1）：39-50, 2019
- 12) 前田健一：仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究. 教育心理学研究. 43（3）：256-265, 1995
- 13) 柴田利男：仲間との対人経験が幼児の社会的コンピタンスに及ぼす影響. 教育心理学研究. 43（1）：85-91, 1995
- 14) 磯部美良, 佐藤正二：幼児の関係性攻撃と社会的スキル. 教育心理学研究. 51（1）：13-21, 2003
- 15) 大内晶子, 櫻井茂雄：幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討. 教育心理学研究. 56（3）：376-388, 2008
- 16) 中台佐喜子, 金山元春：幼児の社会的スキルと孤独感. カウンセリング研究. 35（3）：237-245, 2002
- 17) 細川陸也, 桂敏樹, 志澤美保：就学前児の社会的スキル発達に関連する育児環境の特徴. 小児保健研究. 75（4）：453-462, 2016
- 18) 高木智世：幼児と養育者の相互行為における間主観性の整序作業－修復連鎖にみる発話・身体・道具の重層的組織－. 社会言語科学. 14（1）：110-125, 2011
- 19) 伊藤崇彦：幼児による家族会話への傍参与の共同的達成. 認知科学. 22（1）：138-150, 2015
- 20) 伴碧, 内山伊知郎：大人によるふりシグナルの提示は子どものふり行動を促すか？. 心理学研究. 86（4）：333-339, 2015
- 21) 佐藤正二, 日高瞳, 後藤吉道, 渡辺朋子：幼児に対する集団社会的スキル指導の効果. 宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要. 7：63-72, 2000
- 22) 岡村寿代, 金山元春, 佐藤正二, 佐藤容子：幼児の集団社会的スキル訓練－訓練前の特徴に焦点をあてた効果の検討－. 行動療法研究. 35（3）：233-243, 2009
- 23) 高橋高人, 松原耕平, 佐藤正二：幼児に対する集団社会的スキル訓練の効果－標準群との比較－. 認知行動療法研究. 44（1）：41-51, 2018
- 24) 金山元春, 日高瞳, 西本史子, 渡辺朋子, 佐藤正二, 佐藤容子：幼児に対する集団社会的スキル訓練の効果－自然場面におけるコーチングの適用と訓練の般化性－. カウンセリング研究. 33（2）：196-204, 2000

Development of Social Skills and Social Adaptation in Early Childhood

Yasuko Meifu *

< Abstract >

The purpose of this study is consideration of previous studies on social skills in early childhood. Social skills are very important to maintain smooth interpersonal relationships, and they have a positive impact on facilitating social adaptation and mental health. Early childhood is a period when cognitive abilities related to social skills, such as theory of mind, perspective taking, and understanding of emotions, develop. Through the development of the theory of mind, it is possible to acquire the perspective taking, predicting the intentions and feelings of others' behaviors, and selecting behaviors that match them. In addition, affiliation motives and the ability of controlling emotions facilitate the acquisition of social skills.

If there is a lack of social skills in early childhood, it is difficult to constitute positive friendships, which affects friendships and school adaptation in primary school. Generally, social skills are cultivated in a relationship with the mother during early childhood. Communication with three or more people, including children, is routinely practiced in the home, and the children participating in it are acquiring social skills actively.

Keywords: social skills, early childhood, development, adaptation

* Department of Early Childhood Education and Care, Seinan Jo Gakuin University Junior College